

紫の 話

堀 田 吉 雄



「むらさきの」語原を考えてみた。すぐ思い浮べたのは「群らがり咲きーむらさき」ではないかと思つた。『倭訓之葉』に當つてみると、やっぱりそうだ。人の考えつくことはそんなに違わないものだと感じた。

原野に群らがつて咲きにおつている紫の花があるとすると、多分りんどうか、ききょうではないかと思つた。有名な額田女王の歌。

あかねさすむらさき野ゆきしめ野ゆき
野守は見すや君が袖ふる

紫野が出てくる。この歌の情景は近江の蒲生野というが、京都にも紫野はある。そこに名刹大徳寺があり、誰しも一休和尚を想起するだろう。

一休も紫衣をまとつただらうと思う。僧侶の着る衣の色は普通すみ染めである。そ

れがしだいに出世して、最後は紫衣に到達する。江戸時代に、たしか紫衣事件というのがあった。

天皇が將軍の承諾なく、勝手に紫衣をある坊様に与えたのは怪しからぬとした事件であつた。紫雲がたなびかないことには、み仏は出現なされぬであらう。

私なども、もうそろそろ紫雲たなびいて、お迎えがくる頃かなあと、心の底では感じていたのである。しかし、この世で悪いことばかりしているから、とても紫雲には縁なく、火の車の迎えがくるのかもしれない。

ともあれ、紫という色は、高貴の色とされたことは、昔も今も変わらないようである。だが、今は自由世界の有り難さで、庶民がいくら紫の色を日常生活に取り入れても、誰も文句をいう人がない。

昔はそうではなかった。だから、禁色きんじきといわれている。僧衣では紫は禁色であつた

のであろう。天皇の尊貴を以てしても、將軍のコンセンサスなしには紫衣を下賜することが出来なかった。

もっとずっと大昔に、聖徳太子が冠位十二階の制というものをお定めになったと、国史の教科書にも書いてある。その冠位の最高の色がやはり紫であったという。

降って令制が布かれても、濃紫は、一位にあたる色であったという。中国では、天子の座は紫微宮にあるものとされた。やはり紫がつきまよっていつている。

現在でも、沖繩では家を新築すると、必ず「紫微鸞駕」という四文字を板切れに墨書し、棟木の所にうちつけるのが、民俗になつてゐる。どういふ意味かと聞いても、答えてはくれないが、ただ、そういう仕来りになつてゐるとは話してくれる。おめたい文句には違ひないらしい。

どうやら、紫を尊ぶ思想は、中国伝来のものらしい。あるいはインドが元であるか

もしれない。

インド—中国—韓国—日本というようなコースになつてゐるのかもしれない。それなら西欧はどうかという、これが亦紫を禁色としてゐるのである。

ギリシャ・ローマ以前にエーゲ海文化というのがあつた。実は、このエーゲ海が、古代紫の発祥地であつた。私は、そんなこと知らなかつたのだが、昨夏NHK名古屋スタディオで、小沢吉見氏（名古屋保健衛生大学教授）と対談したことがあつた。

ラジオ番組で「膝を交えて—海女の紫・王様の紫」という題目であつた。私は、自分の研究上、海女の紫のことを知つてゐたのだが、王様の紫については余り詳しくはなかつた。

私は、若い頃西洋史を専攻した一時期があり、紀元前フェニキアという国がエーゲ海に面して存在してゐたことはよく知つてゐた。フェニキアは都市国家で、チルスと

いうのがあつたことも当然承知してゐた。

フェニキアは地中海貿易を手広くやつてゐて、チルスがその一中心港であり、チリアンパープルといつて一種の貝の肉から紫の色素を採つてゐたことも、若干は聞き知つていたのであつた。

しかし、詳細については、小沢氏と対談して教えられた。チリアンパープルは即ちチルスの紫で、それがいわゆる貝紫という動物色素であつた。

古代人が使用した染色は、その九九パーセントが草木染めであつた。紫でも同じこととて、現に日本にはムラサキという草があり、特に武蔵野に多く野生してゐたといふ。

紫草ともいふが、普通は単にムラサキで通つてゐた。これは、根の方に色素があつた。ところが、染色研究家の間では、早くから貝紫という動物色素のあることを問題にしてゐたのである。

それは、不思議にも私の郷土ともいうべき志摩の海女らが、日常何の気もなしに用いていたのである。前者即ちチリアンパールはホネ貝という長さ十五センチぐらいの魚の骨に似た多くのトゲを持つ貝で、フエニキア（現トルコ）の河海に生息している。

後者は、志摩の海にいくらかでも見つけられるイボニシと称する小さな長さ三―四センチの巻貝である。このイボニシの貝肉をそつと貝を廻転さすようにしてお尻の方まで、すつぽり取り出す。尻の先端の少しくうす緑色を帯びて灰色かかった部分に、紫色の色素がかくされているのであった。

この他、北米・南米などに、貝肉の一部に紫の色素を含むものは、いくらかもあるらしいことがわかってきた。単に、ホネガイやイボニシだけの専有ではなかったのである。

私の比較的よく知っているイボニシにつ

いていうと、妻楊子の先などにこの貝の尻肉をつけて、シャツや手拭など、海女の着用するものの一部に模様をつけるのである。

海女には、そういう習慣が古くからあったのである。今では、イボニシを取ってめんどろなことをする海女は少なくなつたが、老海女の間では、今もイボニシによる貝紫を用いてセーマンとか、ドーマンとかいう呪いの秘法を使っている。

セーマンという呪符（まじないの印し）は縦と横と線を九本組み合せたもので、ドーマンは星型である。こういう呪符を貝紫で頭部の鉢巻やイソナカネ（白布の腰巻）に描くわけである。今は簡単に多く墨書する。

海中で作業する時、これらの呪符がついていると海の魔物が寄りつかないといわれているのである。呪符を描く時は、妻楊子などの先で模様をかき、太陽光線にさらす

と、美しい紫色に発色して、潮水にいくらかもまれても色あせることはない。

志摩の海女らが用いる紫は、彼女らの日常の姿であるが、チリアンパールの方は、反対に高貴な人々の専用であった。つまり禁色であった。

ルネッサンスの中世の壁画など見ても、聖母マリヤの服の色は、紫を用いることが多かった。「紫の服をまとつた」人とは、皇帝とか、法王など、最高の人々を意味した。

このように、並べてみると、紫という色が、洋の東西を問わず、最高の色になつていることがよくわかる。これは何故だろうか。私にもよくわからないが、多分この色が静寂の感を見る人に与えるからではないだろうか。

赤色は、太陽の色、動く色と思われる。この赤色に灰色を加えると紫が加つてくる。万葉の昔、

むらさきは灰さすものぞ椿市の
八十のちまたに逢へる児やたれ

こんな優しい歌が、大神神社おほがみの付近で歌
われていたのであった。その他、紫に縁の
ある万葉の歌は多いのである。

紫のあが下紐の色にいでず
恋かも瘦せむ逢ふよしをなみ

これも、絵のような恋の情景と思われ
て、まことに優美である。女性の下紐の
色にしばしば紫は用いられたことが伺え
る。

あかねさす——と歌って額田女王の秀歌
に対して、大海人皇子の返された歌は、こ
れ又すばらしかった。この返歌の中にも、
紫の色はほんのりとおうているのであつ

た。

むらさきのにはへる妹をにくくあらば
人妻ゆゑにわが恋ひめやも

額田女王は、紫のにはふような美女であ
つたと思われる。また、日本独自の総合芸
術といわれる茶道では、紫色のふくさが用
いられていることは、誰も知っていること
である。紫にも、いろいろニューアンスが
あつて、千変万化は見せるものの、終始落
ちついて静けさの中にある紫は、上品とい
うよりいいようがあるまい。

歌舞伎でも、紫はよく用いられている。
揚巻・助六で知られる一場面、助六の額を
飾る長い綱が紫であつた。沖繩舞踊でもこ
の長い鉢巻がよく使われる。

先日、宮中の御歌会始の様子をテレビ
で拝見して、なるほどと思つたことが
一つあつた。天皇のご座席の背景のまん幕

が、美しいうす紫であつた。

その他、むらさきという呼び名、台所で
主婦が日常使う醬油、これを女房言葉でい
うとむらさきであつたし、いやしい魚とさ
れるが美味のいわしも、むらさきといわれ
た。

やはり女房言葉であつた。最後に日本の
王朝文学の代表的な作品が源氏物語である
ことは申すまでもないが、その作者が紫式
部であつたことを忘れてはならないであろ
う。

(一九八一・一・二六)
〔伊勢民俗学会主宰〕